

高山植物等保護パトロール50年の歩み

富山森林管理署 立山森林事務所 森林官 ○住 裕介
森林整備官 太田 祥平

要旨

1971年の立山・黒部アルペンルート全線開通に伴い観光客や登山者が増加したことから、自然環境保護の啓発が課題となり、同年7月に富山森林管理署（当時：富山営林署）、地元自治体、山小屋関係者、民間企業等により立山地区国有林野保護管理協議会が発足しました。協議会の活動として、1972年から高山植物等保護パトロールが始まり、今年で50年の節目を迎えましたので、これまでの活動について報告します。

はじめに

1971年6月に立山・黒部アルペンルートが全線開通し、多くの観光客や登山者が立山・室堂を訪れるようになりました（写真1）。全線開通前から、高山植物等の違法採取や踏み荒らし、ゴミの投げ捨て等が懸念され、自然環境保護に対する啓発を促す必要が予想されたことから、富山森林管理署、地元自治体、山小屋関係者、民間企業等により協議会を発足する運びとなりました。はじめに、1971年7月に立山地区国有林野保護管理協議会が発足し、翌年の7月から、室堂において高山植物等保護パトロール（通称グリーン・パトロール）の活動が始まりました。その後、1979年には薬師岳・雲ノ平地区、1980年には黒部地区、1982年には白馬・朝日・北又地区で協議会が発足し、計4地区でパトロール活動を続けてきました。パトロールの活動内容は、富山森林管理署が主体となって計画を行い、各地区協議会で協議のうえ実行しています。



写真1 立山・黒部アルペンルート全線開通時の様子

1 パトロール活動の概要

富山森林管理署管内の国有林の多くは富山県東部の山岳地帯に位置し、その多くが中部山岳国立公園に指定されています。高山植物等保護パトロールの活動範囲は、北から順に「白馬・朝日・北又班」、「黒部班」、「室堂班」、「薬師岳・雲ノ平班」で構成されており、毎年7月中旬から8月中旬の1か月間、活動を行っています（図1）。

「室堂班」は、宿泊場所である富山県の施設「立山センター」を拠点として、室堂周辺



図1 パトロール各班の活動範囲

のパトロールを行っています（写真2）。以前は8人程で活動していましたが、近年は新型コロナウイルスの影響により4人での活動となっています。

「白馬・朝日・北又班」、「黒部班」、「薬師岳・雲ノ平班」は、各班2人1組での行動とし、北アルプスの山小屋を拠点として稜線を移動しながらパトロールを行っています。昨今のコロナ禍では、山小屋の受け入れ状況により行程の見直しや調整を行う必要があるため、各地区の山小屋関係者と連携をとりながら進めています。これらの稜線班は、高山帯の稜線を歩きながら、山小屋泊まりを転々としパトロールを行うことから、特に体力と経験が必要となります。



写真2 室堂班によるパトロール

パトロール員の主な活動内容は、観光客や登山者へ高山植物等の保護を呼びかける「啓発活動及び注意喚起」、ゴミ拾い等の「美化活動」、立入禁止区域を明示する「グリーンロープ設置」、登山者の安全確保や植生保護のために本来の登山道上を歩いてもらうことを目的とした「雪渓切り」、「標識類の簡易な補修」等です。特に、立山・室堂エリアは富山県の主要観光地であり、多くの観光客や登山者が訪れることから、山の名前や登山のコースタイムを聞かれることもあり、それらに対する知識やコミュニケーション能力も必要とされます。

2 パトロール活動における指導内容

これまでのパトロール活動でどのような指導が実施されてきたのか、1985年以降のデータを5年ごとの平均値で見比べてみます。パトロール員1人あたりの指導件数を棒グラフに、立山・黒部アルペンルート及び黒部峡谷鉄道の利用者数を入込者数として折れ線グラフに表しました（図2）。入込者数は減少傾向にありますが、それ以上に指導件数の減少幅が大きいことから、パトロールが入込者のマナー向上に貢献していると考えられます。また、行為別の指導件数を見ると、登山道外への立ち入りに対する指導が大幅に減少している一方で、近年はストックキャップ未装着に対する指導が増加していることが分かります。

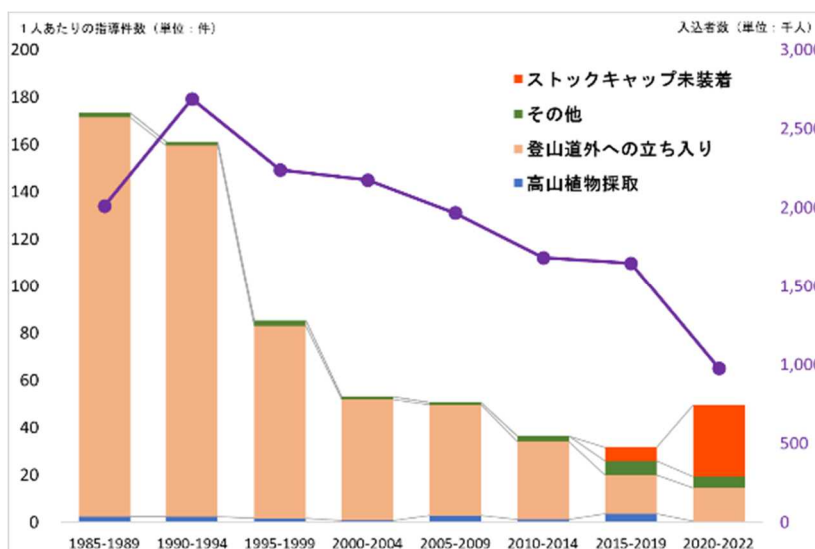


図2 パトロール員1人あたりの指導件数と入込者数の推移

近年、ストックを使用する登山者が増えていますが、ストックの先端にキャップが付いていない場合、高山植物や登山道を傷つける可能性があることから、キャップ装着への協力をお願いします。また、1か月のパトロール期間のみでは周知に限界があるため、富山森林管理署で作成したポスターを2022年度より掲示し、訪れる方への啓発活動として取り組んでいます（写真3）。ポスターの掲示は、室堂ターミナルや各山小屋等にもご協力いただいております、この取り組みへの理解が広がることを期待しています。

3 今後の課題

(1) 登山道・標識等の状況確認

北アルプスでは、過去に設置された登山道や標識等の老朽化が懸念されていますが、範囲が広大であることから、現状や位置情報の把握は困難です。そこで、パトロール員がGPS機能付きのカメラにより登山道や標識等を撮影し、現状や位置情報を記録する取り組みを行っています（写真4）。それらの情報を山小屋関係者や富山県、環境省等と共有し、有効活用していくことが今後の課題となっています。

(2) パトロール員の人材確保

これまでのパトロール員の年齢構成を見てみると、1990年から1994年は10代と20代のみとなっていました。2015年から2019年は20代の割合が減り30代以上の割合が増加しました。また、新型コロナウイルスの影響を受けた2020年から2022年は20代から50代と幅広い年齢層となっています（図3）。稜線班は、広範囲をパトロールするため、疲労の蓄積が多く、特に体力や経験が必要であり、若者や登山経験の豊富な人材確保が課題となっています。そのため、富山森林管理署のホームページだけでなく登山情報サイトにも求人情報を掲載し、安定的な人材確保に努めています。



写真3 啓発ポスター



写真4 GPS機能付きカメラで撮影した登山道・標識

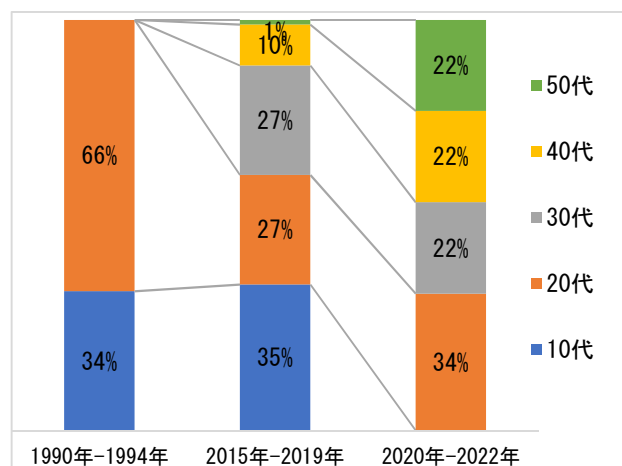


図3 パトロール員の年齢構成

おわりに

1972年から始まった高山植物等保護パトロールは、これまで延千人以上のパトロール員が参加してきました。発足当初と比較すると、指導件数は減少傾向にあり、継続的に取り組んできたパトロール活動が観光客や登山者のマナー向上に貢献したと思われます。中部山岳国立公園には雄大な自然が広がり、高山植物やライチョウ等の希少な動植物が生息しています。これらを後世に残すために、これからも富山森林管理署と地元自治体、山小屋関係者、環境省、民間企業等が組織の枠組みを超えて協力していくことが重要だと考えています。

参考文献

富山森林管理署（1990-2016）「峰々を歩きて」

富山森林管理署（2001）「高山植物保護パトロール30年の歩み」

写真提供

立山黒部貫光株式会社（写真1）